

渡辺和靖著

『保田與重郎研究』

(べりかん社・二〇〇四年)

新保 祐司

本書は、保田與重郎を全否定しようと企てた研究書である。批判ではない、否定である。批判した本ならば、これまでもいくらもあるが、ここまで全否定した研究書は、はじめてであろう。

批判するには、批判する者のよって立つ思想の立場が必要である。その思想もまた保田の思想と同様に批判されうるものにすぎないが、いずれにせよ何らかの思想が前提として存在しなければならぬ。

しかし、本書は、思想によらず、というよりも思想がないままに、ただひたすら実証的に保田の著作が、「模倣と引用のアラベスク」にすぎないことを論証しようとしているのである。そもそも思想家の名に値しないいかさま師であり、結果は当然、全否定となる。

「あながき」の冒頭に、次のように書かれている。

本書を書き始めた当初において、本書がこのような形で完結するということを予想してもいなかった。本書はむしろ

ろ思わざる結果として成立した。保田與重郎の思想の本質をなすものを求めて、私は保田の心の奥深いところにかまるとした空虚を発見したのである。

この「黒々とした空虚」という表現は、本書の中に何回も出てくるキーワードであるが、かなり「文学的」で主観的な表現であることをここで、まず注意しておくべきだろう。「あながき」は、次のようにつくづく。

少年時代からの日本古典に関する深い素養に裏付けられた思索を華麗な文体によって繰り広げた独創的な思想家であり、その切実さにおいて当時の青年たちを魅了したというのが、保田與重郎についてのおおかたのイメージであり、「私自身もはじめは保田のうちにそのようなものを期待していた。しかし研究を進めていくなかで、保田が思想形成の過程においてのみならず、批評家として一家をなした後に、おいても、多くの先行思想家の影響を巧みに綴り合わせて自らの思想を構成していたことが見えてきた。保田の思想の本質は、いくつかの思想の断片を綴れ織りのように結び合わせたものであることがしだいに明らかになっていった。習作においては、谷川徹三、土田杏村、芥川龍之介などの「模倣と引用のアラベスク」であり、それは批評家として一家をなした後も、本質的には変わらず、「コラーージュとモニター」ジュツつまり空虚をその本質としていた」とされる。

そして、習作を増補し補訂することで成立した『日本の橋』

『戴冠詩人の御一人者』などでは、影響を受けた思想家の名前を隠す傾向があったことを論証している。これでは、保田は、相当性悪ないかさま師ということになるであらう。

「独自の研鑽から導かれた土田の結論を、保田はそのまま自らの論文に流用しているのである。」(一一三頁)「ほとんど土田の論文をなぞったものであることがわかる。」(一一八頁)など、著者が根本的に保田に対して悪意を抱いているように思われる箇所が、散見する。ひたすら実証的に論証しているような外見はとっているが、実は主観的で、保田を憎悪する気持ちですべて見える。「黒々とした空虚」という表現を、「文学的」で主観的といった所以である。悪意の例は、いくらもあるが、一つ挙げれば充分であらう。

保田の思想は、先行思想家から学んだアイディアを失鋭化し、それを華麗な文体のうちに包み込むところに成立した。保田にしてみれば、その文体にこそ己の独自性があるという思いがあつたかもしれない。しかし、高校時代の習作を手元に広げながら、しかも、その時受けた先行思想家の影響に口をつぐみ、新しい評論の筆を執る保田の姿には、なにか傷ましいものがある。華麗な文体のその奥に、黒々とした保田の心の空虚が見えてくる。(九七頁)

このような保田の「姿」を想像し、それに「傷ましい」という主観的な感想を抱くのは、客観的で実証的な研究という外見のほころびであるが、やはり、対象への愛情から出発しない研究

というものが、結果として「空虚」にたどりつく見本みたいなものである。

この六百頁に及ぶ大部な労作は、この保田のいかさま性を「猟犬のように」突きとめることに集中していて、それは或る意味で成功しているといえる。今日にも、いまだ根強くのこっている保田神話を解体する作用は、充分持つていであらう。

私も、保田にそういううさん臭さを時に感じることはあるが、保田がそれだけの文学者だとは思わない。「模倣と引用のアラバスク」だと全否定されるものではないと考えている。そもそも「模倣」とか「影響」とかいう言葉は、文学や思想を研究する上で充分注意して使わなければならない性質のものである。

保田與重郎は、根源的に「文人」であつて、「思想家」ではない。日本思想史研究のアプローチでは、やはり届ききらないであらう。思想史研究は、「意」を問題にするが、「文人」の急所は、「姿」だからである。

本居宣長に、「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」という言葉がある。この逆説について、小林秀雄は『考へるヒント』の中の「言葉」と題された一文で書いている。「こ、で姿といふのは、言葉の姿の事で、言葉は真似し難いが、意味は真似し易しと言ふのである。普通の意見とは逆のやうで、普通なら、口真似はやさしいが、心は知り難いと言ふところだらう。」「意は似せ易い。何故か。姿がないからだ。」

「似せ易い」「意」を保田が、「模倣」したことに、そしてそ

それを隠したりしたこととうさん臭さを感じるとしても、私はそれを大したことだとは思わない。そもそも「似せ易い」からである。「文人」保田の、あるいは文学の根本的な問題は、「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」という逆説を理解するかどうかにかかっている。「似せ難い」言葉の姿を保田が創造したことが大事なのであり、「意」が「似」ていることなどを穿鑿したところで何が生まれる訳でもない。問題は、土田杏村の文章が、現在忘れられ、保田の文章が今日の若い日本人にも感動を与えているのは何故か、ということである。

「意」の内容や影響関係を分析するに専らの日本思想史の方法では、「姿」が生死を決する「文学」の深奥には手が届かないのではないか。保田の文章を、「華麗な文体」という平板凡庸な表現ですましてしまっているところにも「姿」への鈍感さが露呈している。

「影響」ということについては、同じく小林秀雄の『本居宣長』の四章のところの文章を思い出した。

景山に「不尽言」といふ著作がある。宣長が、これを読んだ事には確証があり、研究者によつては、宣長の思想の種本はこゝにあるといふ風に、その宣長への影響を強調する向きもあるが、私は、「不尽言」を読んでみて、むしろ、さういふ考え方、影響といふ便利な言葉を乱用する空しさを思った。「不尽言」から、宣長のものに酷似した見解を拾ひ出すのは容易な事である。古典の意を得るには、

理による解を捨て、先づ古文の字義語勢から入るべき事、詩歌は人情の上に立つといふ事、和歌といふ大道に伝授の道はない事、わが国の神道といふものも、日本の古語を極めて知るべきものであり、面白く附会して、神道を売り出すのは怪しからぬといふ事、等々。しかし、このやうな見解は、すべて徂徠のものであると言ふことも出来るし、これに酷似した見解を、仁斎や契沖の著作から拾ふのも亦容易なのである。見解を集めて人間を創る事は出来ない。

「見解」を「拾」ひ出し、その「影響」を穿鑿する日本思想的な方法では、保田與重郎という「人間」を論ずることはできないのではないか。保田は、「文芸批評家」であり、その文芸批評は、「人間」に「相渉」っているからである。

著者が、「発見した」と誇る「保田の心の奥深いところにわかまる黒々とした空虚」なるものは、北村透谷、国木田独步、小林秀雄、あるいは高見順、もつといえは近代日本の文学者のほとんどに「発見」できるものではないか。別に保田の特徴でも何でもない。

三島由紀夫が、どこかで、一見客観的に見える研究ほど、実はイデオロギーを隠し持っているものはないという意味の卓見を書いていたのを思い出す。

(郁留文科大学教授)